

あなたの家を思う熱心がわたしを食い尽くす

まず、テキストを祈りながら朗読してみよう。69 編は第一人称単数「わたし」の文体でなされる「救いを求める祈り」である。「ゆり」に合わせては、45 編、60 編、80 編を参照のこと。たぶん、解説は 45 編の処でしているはず。内容はバビロン捕囚期前後であるからダビデの詩ではなく、エレミヤという説もある。

私が掲げたメッセージのタイトルはヨハネ 2:17 に引用され、キリストの苦難の予告、深い解釈を提供している。詩編 22 編に次いでキリストの苦難を描く詩編として新約聖書に好んで引用されている。(参照 69:22) 詩編 69 編もヘブライ語本文を精査し、解説するには長いので分割して扱わざるを得ない。途中で切りにくいので 1～13 節で便宜的に区切ることにしよう。

1. 大水に巻き込まれ翻弄されるような生 2～3 節

詩は、「わたしを救ってください、神よ」(hōwōšî'ênî 'ēlōhîm) という切実な願いで始まる。「救い」の語は預言者「ホセア」やイエス＝ヨシュアと同じ用語である。神と私との間の「わたし」と「あなた」の親密な関係である。ここで、人を混乱に陥れる経験が大水に巻き込まれて翻弄される出来事として描かれている。水が「私の靈魂にまで」('ad nāpeš) 来たれりという(新共同訳「喉元」)。人が立つべき確りした大地がないことほど不安なことはない。東日本大震災と津波、九州では、朝倉、人吉、大牟田の水害を思い起こす。私もボートやヨットの転覆、台風の日の遊泳、急流の川で着物のまま泳ぐなど随分危険なことをしてきた。「わたしは深い沼に嵌り込み、足がかりもありません。大水の深い底にまで沈み、奔流がわたしを押し流します。乾燥地帯での雨は時に大雨となり、イスラエルの民を悩ませたのであろう。

2. 信仰者を悩ませる敵対者に直面して 4～5 節

4 節が前節の大水の経験と繋がっているのかは不明である。信仰者は神に「叫び続けて疲れ、喉は涸れ、神を待ち望むあまり日は衰えてしまいました」という。現在は、マスク生活、そして、讚美歌を大きな声で歌わないので、あるいは、多少しゃべり過ぎて「喉が涸れる」経験をしているかも知れない。

信仰者を憎む者は明確な理由もなく敵対し(だから対処できない!)、その数は髪の毛よりも多いと感じている。信仰者を滅ぼそうとする者は力を増していると言う。神に真実に生きる者たちは、迫害下、弱く、貧しくされてきた事実は歴史が証言している。

3. 自己を内省する 6～7 節

目を困難な状況や敵対者から自分自身に転じてみれば、自分の完全性を主張することなど出来ない。神は、私たちの愚かさを知っておられる。具体的罪過も神の前に隠されていることはできない。さらに思うことは、自分のことより、自分の愚かさによって他者を躓かせ、神に望みを置く者、神を求める者たちが私(たち)のゆえに恥を覚え、屈辱に感じてしまうことである。昨今のロシアと欧米のウクライナにおける代理戦争はまさに、キリスト教の影響そのものではないにしても、ユダヤ・キリスト教信仰は攻撃的で、排他的で、危ないという印象を他宗教の人たちに与えることにもなる。

4. 神殿（家）を思う熱心がわたしを食い尽くす（'ākālātānī） 8 - 1 3 節

この数節は主イエスの生き方を髣髴とさせる。神に仕えて生きることは、敵対する他者を受容し、教会そして弱い、貧しい者に仕える働きは、どこかのちを削るような働きでもあるのか？「あなたの神殿」は bêtākā であるから神の家への熱心（qin'at）である。神は情熱（passion）の神、ジェラシーの神、そして、共感共苦（compassion）に生きることに導く神ではないか。詩編 119:139「わたしの熱情（qin'atī）はわたしを滅ぼすほどです（simmatatnī, has consumed me）。イエスは隣人を愛するだけでなく、その動機を与える神を激しく求め、その熱意が彼を十字架の死へと導いた。まさに、イエスの神の家を思う熱心がイエス自身を食い尽くし、十字架の死へと誘ったとヨハネ 2:17 は語る。

イエスは律法学者、ファリサイ人との対論において、そして、受難週の不当な裁判によって嘲られ、屈辱を与えられた。名誉の受難と屈辱の苦難とは区別されるべきであろう。マルコ 3：21、31-35、ヨハネ 7；4-5 が語る主イエスとその家族の間の葛藤は、まさにノンクリスチャン家族の長男で献身した私の経験でもあった。

断食し、荒布を纏って修行をすれば、これも嘲りの対象となる。イエスは断食したのだろうか？マタイ 4:2（Q資料）では40日の断食が記されているが、しかし、主は自由人であられた。イエスは大食漢で大酒飲みであるとも揶揄されていたらしい（マタイ 11:19）。マタイ 9:14 - 15 には「イエスの弟子はなぜ断食をしないのか」と問われたことに対して、「花婿と一緒にいる間、婚礼の客は悲しむことができるだろうか。しかし、花婿が奪い取られる時が来る。そのとき、彼らは断食をすることになる。」とある。心に響く言葉ではないか！「花婿」主イエスが到来している。この喜び。しかし、十字架の死によって花婿が殺される時が来る。断食も時と場合があるのであろう。詩編のこの個所では、祖国を思う断食であらうか？それがかえって嘲りとなったとは！

城門に座り、街を治める有力者たちからも詩人は非難を受ける。これが、信仰者が直面する諸問題である。共に祈ろう！